地域性の形成をめぐって

坪内良博

今回の研究集会は、A02班のテーマ「地域性の形成論理」をそのまま生かした形で、議論を進めていきたい。何をもって「地域性」というのか、我々も完全な一致は見ていないが、極めて重要な言葉であることは共通の認識だろう。ともかく、ものごとを漠然と捉えていくことから始めていこう。

ここでご報告いただくのは、アフリカ、中東、インド、中国、東南アジアで実際に研究を行ってこられた方々だが、それぞれが捉えられている「地域性」の比較を通して、その形成に寄与する要因の違いを捉え、地域性のイメージを浮かび上がらせていきたい。

だが、地域を境界のある完結した実体として捉えようというつもりはない。どのような要素がそれぞれの地域性の形成に関連しているかが、一番の重要な関心事になるだろう。それは生態環境、あるいは宗教、社会制度と、話の展開によって変わることになるだろう。このような形で地域性を抽出する作業は、地域を実体として捉えることとは違ってくる。

例えば、東南アジアを考える場合にも、東南アジア全体を一つの単位とし、そこに普遍的に認められる特性を地域性と考えようとするのは非常に困難だろう。ある場合には、代表的な部分を選び出すことも可能だろうし、細分化して考えることも可能だ。さらに、細分化した地域を統合する試みも可能だろう。これらの作業と、政治的な統合体として定義された「東南アジア」との関連を論ずるのは、またもう一つの課題となる。様々な側面を持つ問題を考えるに当たり、まずはルースなところから出発するのがいいだろうというのが、今回の提案である。

先回の研究会では「世界単位」が主な論点であった。地域性を認識する場合、「世界単位」は非常に気になる言葉である。だが、今回はこの言葉も曖昧な状態に保ったままにしておきたい。従来からの区画を仮に地域として漠然と捉え、その中心的な構成概念を探りながら、「地域性」への接近を試みようというのが、今回の議論の趣旨である。